半導体漫遊記

湯之上隆

(351)

残念な台湾フォーラム

TSMC熊本工場の疑似体験

2024年8月30日(金)、ホテル・オークラにて台湾日本研究院が主催したフォーラム『2024年台日科学技術ダイアログ―経済安全保障と台日科学技術協力の「九州経験」―』が開催された。参加者は約150人で、その8～9割が台湾人であり日本人は20人程度とわずかだった。

ここで台湾日本研究会とは、21年に設立された台湾のシンクタンクで、台湾と日本の技術協力などを推進することを目的としている組織である。

筆者は日本の半導体の専門家として30分の講演を依頼され、フォーラム終了後の晩餐会にも招待された。しかしフォーラムでの筆者の渾身の講演は、台湾人の不評を買った。というのは、筆者は台湾のTSMC本体において7nm、16nm、28nm、40nmの半導体の売上高が低下していること、および日本向け半導体売上高が低下していることなどを定量的に示した上で、TSMC熊本工場ではつくるものが無いことを指摘したが、筆者に続く2人の台湾人講演者が自分の講演時間の半分以上を割いて、湯之上批判を展開したからだ。

ただし、その批判は客観性を欠き感情的なものだった。例えば「TSMC熊本工場について、いろいろな意見があってもいい。しかし、いずれ誰の意見が正しいかが明らかになるだろう(つまり湯之上の主張が間違っていると言いたいらしい)」とか「TSMCはこれまで何度も苦境に直面してきたが、必ずそれを乗り越え、今や世界最大の半導体メーカーになった(しかし客観的な根拠や定量性のある議論はまったくなし)」などである。

そして台湾人の講演者たちは、声高に湯之上批判を繰り返し、興奮してくると演台を足で思いっきり「ドスン、ドスン」と踏み鳴らすなど、およそ台湾を代表する識者とは思えない態度を取った。

さらに台湾人の講演者は、台湾語で書かれたスライドを示しながら台湾語で講演した。そのため筆者は台湾語のスライドを1ミリも理解できなかった。その一方で筆者には、英語のスライドを作成するように要求されていた。これはどう考えてもフェアではない。

以上のような事から参加者の大多数を台湾人が占めたフォーラムおよび晩餐会では「ここは台湾なのか?」という不快感を持った。そして、これはTSMC熊本工場そのものだと思った。というのは台湾人が主導権を握っているTSMC熊本工場も標準語は台湾語になっており、ソニーから派遣されている日本人がコミュニケーションを取れず、大変な苦労を強いられているからである。

加えてフォーラムの後に開催された晩餐会では、主賓となっていた甘利明・衆議院議員(自民党半導体議連会長)に対して名刺交換の長い行列ができ、写真撮影の依頼が後を絶たない光景を間近で見て吐き気を催した。それはまるで「権力に群がるアリ」のようだったからだ。

結局そのような光景を見ながらの晩餐会のお食事は、おいしくも何ともなかった。そして帰路についた時、甘利議員には名刺交換を申し出て「あなたの行っている半導体政策は間違っていますよ。税金の無駄遣いは止めてください」と言えばよかったと後悔した。ちょっと残念だった。

(微細加工研究所・所長)

台湾日本研究会主催の晩餐会で甘利明衆院議員に群がる台湾人たち(筆者撮影)